

### <あこのころの「誌要」>私と「日本文学誌要」 ときどき「そとぼり通信」

藤村, 耕治

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

100

(開始ページ / Start Page)

28

(終了ページ / End Page)

30

(発行年 / Year)

2019-07-27

## 私と「日本文学誌要」

### とぎどき「そとほり通信」

藤村 耕治

初めて手にしたのは、32号(85・7)だった。入学後三ヶ月が経った七月の月曜二限、小田切秀雄先生の「日本文学概論」の授業で配られたと思う。(当時の「概論」はベテランの教授が一人で担当されていた。)表紙のデザインに「古めかしいモダンさ」と伝統の重みのようなものを感じた。どんな人が書いているのか、とまずは各論文の末尾を覗くと、執筆者の内訳は過去の卒業生三人、修士生一人、留学生の博士生一人、教授一人、という布陣だったが、それ以外に学部四年生が一人いるのを見て、驚いた。

『故旧忘れ得べき』試論、筆者は中田聡という人。初めは、自分と三つしか違わないのにすごいな、と単純に思った。高見順の転向小説を扱った論文だが、冒頭に目を走らせると、すでに研究者然とした堂々とした書きぶりで「転向文学」という概念の曖昧さを指摘することから始まって

いるのを読んで、二度魂消た。頑張れば、自分もこんな論文が書けるようになるのか、と奮い立つ気持ちと不安な気持ちとが交錯した。教授の方は立石伯「文学と思想の命運(一)」と題された黒井千次論。この時はまだピンとこなかったが、のちにこの論文の筆者立石伯こと堀江拓充先生のゼミに入り、そこに院生として参加していた中田聡さんから、ゼミの日が憂鬱になるほどしごかれたことを思い合わせる、この号との出会いは私の大学生活を予見的に決定づけていたように思える。

続く33号(同11)には、益田勝実・廣末保両先生の国文学会での講演記録(益田先生は自分のものは研究報告だ、と言われた由で、目次には「講演」と銘打たれていない)、立石伯の随想、のちにお近づきになる堀江ゼミの先輩の卒業論文などが載っていた。あるいは36号(87・3)「小田切秀雄教授退職記念特別号」では、小田切の「近代文学」創刊同人以来の盟友たちが挙って目次に名を連ねていた。巻頭を飾る埴谷雄高のエッセイには、この戦後文学の巨人の新稿をいち早く読めることに興奮し、本多秋五の再録論文、佐々木基一・小田切の講演、また彼らより一世代下の谷沢永一の随想などを読み、いつかこの雑誌に自分も書いてみたい、という思いを一層強くしたものだ。が、この調子で書いていくと大幅に制限枚数を超えそうなので、時間の針を一気に進める。

私が初めて「誌要」に文章を載せたのは修士二年の時の

43号(90・11)で、「中野重治研究と講演の会」主催の研究講演会記録集『中野重治と私たち』の書評であった。たまたま法政で87年に開かれた「中野没後八年の会」で聴いて感動した埴谷雄高の講演についても触れ、それなりのものが書けたと思っていたら、編集長鈴木和雄による編集後記に、「一般的に見てどの書評もどうも「図書紹介」をふみ出していないように受取れる」とあった。その号には他に三篇の書評が掲載されていたが、自分のことを言われていると一途に思い、自分への失望と恥ずかしさを覚えるという、苦い〈初活字?〉となった。

次の44号(91・3)に、修士一年の時に授業での発表を基にした「高橋和巳『邪宗門』考」という論文が掲載され、本格的な〈誌要デビュー〉となったが、この号を見るとその一年前に、乗っていた自転車車を車に引っ掛けられて鎖骨を折り、ひと夏入院した記憶が甦る。そういえば事故に関わるエッセイ「抽出ということ」を前年の「そとほり通信」(90・12)にも書いていた。気負いすぎた文章で、こちらはまだあまり良い出来ではなかった。

あらためて「誌要」の伝統と重みを確認したが、47号(93・7)、鈴木氏の逝去に伴って新編集長になられた田中單之さんの編集後記に「(日本文学誌要)とは」大変なものなのだ。近藤忠義『日本文学原論』、片岡良一『日本自然主義研究』は、すべてこの「日本文学誌要」に書かれたものであった。そうして、あの一世を風靡した「歴史社会

学派」の道が切り開かれて行ったのだ。」とあるのを見た時だ。もっともこれは、「日本文学誌要」の前身の「国文学誌要」(32||昭和7年7月創刊の「国文学会報」が33||昭和8年12月の第4号から名称を変えて発刊、以後36||昭和11年11月、第4巻3号まで12冊を刊行)のことであるが、左翼運動への苛烈をきわめた大弾圧の時期から日中戦争開始前のひととき、法政国文学会が充実した学術誌を年間平均約3・5冊のペースで出し続け、見事な成果を上げていたことには間違いない。この田中氏の文章は長く心に残っていて、私自身が編集に関わるようになった(2002年3月、65号)とき、やはり編集後記でこの言葉を引き、「伝統の重みに感じ入り、改めて本誌への執筆に対して、襟を正すような思いがしたのをよく憶えている(66号、02・7)」と書きつけている。続けて「伝統の尊重は守旧を意味しない。国文学会の歴史は『日本文学誌要』の歴史である、と後世に堂々と公言できるような学術誌作りを、今後目指したい」としているが、その思いは変わらない。

その後「誌要」には何本も論文を載せたが、恩師の退職の際に刊行された85号「特集・立石伯」(2013・3)や、一緒に「法政文芸」の創刊号を作った笠原淳さんの追悼特集号(93号、2016・3)に論考を寄せた時には、少しでも学恩に酬いたいという気持ちと、時の経過に対する感慨とが交々沸いたものであった。(学恩と言えばもうお一人、勝又浩先生のお名前を逸するわけにはいかない。勝又先生と

は、やはりその退職記念号（79号、2009・3）の鼎談でこ一緒したことなど懐かしく思い出すが、先生から受けた学恩に対しては、少しでも酬いるどころか、負債ばかりが溜まっている……）

最後に、「誌要」本誌ではないが「そとほり通信」から忘れがたい文章を紹介したい。91年3月発行の24号の巻頭言、タイトルは「ハバがきく日文卒業生」、筆者は小田切秀雄名誉教授。何やら小田切先生の話題に終始している気もするが、いまの学生達にも是非読んでほしいので、最初と最後を引く。「どこかを落ちて法大に入ったのだとしても、決して劣等感をもたないで下さい。とくに日本文学科の場合に。——かつて法政日本文学科出身だというと、他大学の国文科出身者たちにたいして、たいへんにハバがきいたものでした。（中略）法政日本文学科からは実に多くのすぐれた人物が輩出しています。在任中のころは、毎年日文一年生全部を相手の『文学概論』（日本文芸学概論）の最初の時間に、法政大学日本文学科生が劣等感をもつならそれは不当だ、大いばりで進んでいいのだから。だが、それにあたいするだけの実力を自分でつけておくようにせよ、と必ず述べたものでした。」

（ふじむら こうじ・本学教授）